

信 毎 歌 壇

小島 なお選

角の店は新装工事警星は一度と戻らず宇宙の彼方へ
 (千曲市) 森川 重美
 妻の死後出版せよという自伝がっかりしながらペ
 ーシを閉じる
 (中野市) 増田きみ江
 ねぎたれとねぎ味噌などの話して楽しいよねと夕
 焼け見せる
 (松本市) 川久保恵子
 記載台下からのぞく下半身これは確かに夫婦とわ
 かる
 (長野市) 山田登志夫
 白内障術後の目薬日に四度遠き山並送電塔立つ
 (中野市) 小林かつ子
 「停まります」見知らぬ町へ降りてゆく背にそれ
 ぞれの生活を思う (東京都板橋区) 岩間 洋介
 ベルマークあるかと孫が問ふたればどうとう来た
 かあるぞと答ふ
 (千曲市) たじまたける
 ハロウィンの街の少女に声もらい白杖は使わず肩
 に手を置く
 (千曲市) 上原 博司
 テレと越しにも匂ひくる木犀の香の道走る出雲駅
 伝
 (伊那市) 中村 初治
 新聞の御節の広告鮮やかで横目に見ては朝飯食べ
 る
 (佐久市) 小泉 英介

第一首、街角の店と地球に接近した警星。一見かかわりのない事物が、偶然や必然の時間軸のなかで世界を形作る。第二首、あとがきの著者のことわりを作者は「妻」の立場から受けとったのだろう。がっかり、わかる気がする。第三首、慰話でもちきり。ささやかな話ほど楽しいもの。穏やかな一日の終わり。第四首、投票所の光景だろう。下半身でそうとわかるのは長く連れ添った夫婦だからか。

選評

米川 千嘉子選

予防接種に泣く幼子を見守るはおほかた父親 それもよきもの
 (千曲市) 中村 美樹
 蒸し羊食べて少年団は解散す終戦秋の夜団長泣き
 たり
 (長野市) せきたつお
 懐かしきは和梨の白さいくつもの小さな笑い声が
 聞こえる
 (松本市) 飛 和
 楽しんで遊ぶものだと知って欲しババ抜きに負け
 泣きじゃくる孫
 (佐久市) 小泉 英介
 飼いた猫が五匹仔猫を産んだから貰ってくれと酒注
 くママさん
 (岡谷市) 吉池富貴勇
 初雪の並木道ゆく学生のトートバッグからチワワ
 の顔
 (小諸市) 加藤 陽介
 退屈で動き出したる幼子に葬儀の空気が少し和らぐ
 夫挿して年ごと見上げし月桂樹庭師はハッサリ根
 元から伐る
 (長野市) 島田 怜子
 渋いかも知れぬと友がツヤツヤの秋の美二つ我に
 握らす
 (長野市) 松本 博人
 恵子逝き三十七年一日とて思わぬ日の無く施設に
 暮らす
 (小諸市) 篠原 昭枝

第一首、仕事を休んで子供に付き添うのが「おほかた父親」という現代。そうではない時代に子育てをした感慨が柔らかない。第二首、戦時中、お国のためにと少年団でさまざまな奉仕活動をしたのだらう。団長だけが泣いている。第三首、どういう場面の「笑い声」かはわからない。「和梨の白さ」だけでつつましくも親密な感じが。第四首、孫に泣かれて困った作者の様子がほほ笑ましい。

選評

小池 光選

拾ひ来し靖国神社のどんぐりを戦死の叔父の仏壇に置く
 (飯山市) 小野沢竹次
 木枯の動物園に人のなくライオンの吠えを夕まぐれ
 (小諸市) 加藤 陽介
 赤んぼがフワフワと口ならすいよ乳歯がでてくるのかな
 (飯綱町) 小林 紀子
 われが打つ一点一点候補者の名前を刻む点字投票
 (千曲市) 上原 博司
 青空に藤袴の花寄りそいてアサギマタラを待ち焦がれおり
 (富田村) 小田切孝子
 下校して帰毛をすれば母が居て小さな幸せ昭和の時代
 (木曾町) 新村 亮三
 呼ばれたる気がして仰ぐ弦月に忘れ物せじごととき
 夕暮れ
 (長野市) 近藤 光子
 「これからはお幸せに」と義姉に言い手をもてはこおりのごとく冷たし
 (長野市) せきたつお
 山菜頭は赤い実をつけヒヨドリが選んでくれる時を只待つ
 (小布施町) 市村 憲彦
 ケイタイもつで時計も忘れ来て見上げし空に時刻をたづぬ
 (長野市) 北沢 京子

第一首、戦死した叔父の仏壇の前に靖国神社のどんぐりを置く。このどんぐりというところが具体的、即物的でいい。短歌はこういうモノの提示で印象を強くする。第二首、夕方の動物園。もう人のすがたは見られない。ただライオンが吠える。悲壮な感じがして胸をつかれる。事実だけを述べて印象強い。第三首、赤んぼはお孫さんか。一転してかわいらしい。歯の生える喜び。

選評

源 (松本市) 興 絹枝

いゆへ (松本市) 興 絹枝

きたか (豊后村) はやしのもりんど